

創建

そうこん

2015・7・10 VOL. 50 NO. 2 (通巻156号)

巻頭言：速水清孝・1

平成28年度卒業研究テーマ・2～3

日本建築学会福島WG・3

日本建築学会奨励賞受賞：山岸吉宏・4

日大工学部の思い出／アーキテクトコース見学会・5

新任紹介・6

学術論文・発表論文／教室ニュース・7

教職員名簿・8

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

厳しい冬を越え、待ちかねた春が訪れるや、桜の開花を合図に草木がいっせいに芽吹く。東北・福島の春は本当に美しい。さながらイギリスのようです。最近散策を重ねた磐梯町の、慧日寺の周囲などは、まるで湖水地方にも似た、息を呑むほどの美しさでした。

震災とともに東北にきた私は、以来、福島のかんりの範囲を歩き、そして歩きたびに、そうした表現は大げさではないとの思いを強くしています。

さて、私が学生時代より志し、そして今もいる建築の世界は、人が生活を営む環境を扱う世界です。

その意味では、震災からの復興に向け、新たに物が建つのは喜ぶべきなのですが、心の片隅ではそう手放しで喜べずにもいます。

それは、私が現に今取り組んでいるのが、建てることよりはむしろ、すでに建てられたものを護る行為だからなのかも知れません。今まさに壊されようとしているものすら護ろうとする。いささかおせっかいで、「建築、すなわち建てる」という発想からすれば、矛盾にも思われかねない行為です。

振り返れば、私が建築の道を選んだのは、建築の寿命は人の寿命より長く、それゆえにじっくり腰を据えて考えることの許される分野に思えたからでした。

時代の流れに素早く反応できるタイプでない私にとって、そのイメージはとても魅力的でした。きっと、建てるのはもちろん、その後、長い寿命をまっとうするまでの全てがこの分野の対象なのだろうと想像してもしました。

ところが当時、1980年代後半の大学は、もっぱら新しく建てることしか扱わず、そのことに違和感を覚える傍らで世はバブルへと向かい、長く使われるものだったはずの建築は、消費財の位置に堕ちていきました。

勢いを増すばかりの、まさに「建設の時代」と言うべき状況に疑問を感じつつ、卒業後携わった設計の実際は、経済行為でもあってじっくり考える余地はなく、せめてもと、自分の手がけるものはできる限り長く持つよう心がけ、逆に、短命になりそうな仮設的な仕事は意識して避けてきました。

それから20年余りが経ちました。21世紀に入って15年。でも、状況にさして変わりはないようです。建築界はバブル以後の不況の時代をただ冬の時代と捉えて、寒さを耐えて過ごただけでした。今や震災復興とオリンピック（2020年）によって増えた量を背景に、「壊して造ることこそ」という建設の時代が再び訪れています。

ポスト建設の時代に向けて

教授 速水清孝

これほどまでに建物が粗末に扱われる時代が続く、あるいは繰り返されるとは思ってもみませんでした。

その姿は、欧米とは異なるようです。

この冬、良質な和を感じさせる建築として外国の要人からも評判の高い「ホテルオークラ東京」（1962年）が、オリンピックを前に建て替えるを決めたというニュースに、ワシントンポストが「日本の取り壊し文化の犠牲者」と報じたと耳にしました。しかしそれを恥じる声は聞こえてきません。常々「アメリカでは」「ヨーロッパでは」と舶来と見ればありがたがる日本人が、どうしてこの問題だけはそうしないのでしょうか。

こう書くと、いかにも復興の行く手を阻み、進歩を嫌う保守主義者のように映るかも知れません。

しかし私は進歩を否定しているのではなく、懐古主義的に過去を賛美して

いるのでも、「何が何でも全て残せ」と言っているのでもありません。

ただ私は、風景のように私たちの日常の背後にあるものには、できる限り断絶があって欲しくないと思うのです。変化はあってしかるべきですが、そこには連続性があるべきです。変化を意識することなく変わるには、自ずとふさわしい速度と量があるのではないかと、いうことでしょう。

どんどん建て替わることは、一見社会の活力を表すかのように映ります。若々しく、元気象徴にもなる。でも若い世代だけではないのが社会です。日常生活はそもそもそれほど進歩的なものでもない。ましてそれを下から支える風景、そしてそれを構成する個々の建築に求められるものもまた、本質的には同じでしょう。

どうしたら、そんな「ポスト建設の時代」（すなわち建設の時代以後の時代）を迎えることができるのか。もちろん、社会にとってよく、できることなら、私にとっても心地のよい形で。

その突破口になるのは、もしかすると田舎の民家なのではないか——。そう思ったことが、私が地方を志したきっかけでした。都市の家は短命、田舎の家は長寿。100年建つものも珍しくない。ならば、都市の論理一辺倒から脱することができれば、建物が消費財でなく、資産となる社会への糸口になるのではないかと。

冬が厳しければ厳しいだけ、春が来た時の喜びも増します。なぜかこのことについては舶来をありがたがらない日本の社会が、私が言うポスト建設の時代を受け入れるまでの冬は、きっと長く厳しいでしょう。心ある地道な取り組みもあるものの、それが社会の常識となるにはまだまだ遥かに遠い。

それでも、冬の後には必ず美しい春が来る。

冬の厳しい東北では、そのことが決して夢物語ではないと思えるのです。

平成28年度 卒業研究テーマ一覧

建築ゼミナールを受講する学生は、ここに記載されている卒業研究テーマを参照のうえ、所属する研究室を選択しましょう。

計画・環境系

■環境工学・設備

濱田 幸雄 教授〔論文〕

環境工学研究室

1. 高機能遮音木床の開発
2. 風車音の測定法に関する研究
3. 風力発電施設からの騒音伝搬モデルの構築
4. 床衝撃音の評価方法に関する研究
5. 集合住宅の遮音性能水準に関する研究

森山 修治 教授〔論文・設計〕

環境設備・防災研究室

1. 病院や住宅の省エネルギーと災害時の生活継続計画の研究
2. 古民家や歴史的建造物の防災と保護に関する研究
3. 古民家の居住快適性に関する研究
4. 浜通り地域の津波避難計画に関する研究

■歴史・意匠

速水 清孝 教授〔論文・設計〕

山岸 吉弘 助教〔論文・設計〕

建築歴史意匠研究室

1. 建築・都市の歴史に関する研究
 2. 建築・町並みの保存と活用に関する研究
 3. 建築技術の歴史に関する研究
 4. 大工の技術と組織に関する研究
 5. 建築家の作家論に関する研究
 6. 建築技術者の人物史に関する研究
 7. 建築家を中心とする建築技術者の職能と法制に関する研究
- 〔設計〕持続可能な社会に向けた建築の提案、または「歴史」という発想を踏まえた建築や都市へのアプローチ

■建築計画・設計

鈴木 晃 教授〔論文・設計〕

福祉居住計画研究室

高齢・単身社会に対応した居住に関する研究と計画

1. 日本の「バリアフリー」概念
2. 介護保険の住宅改修
3. 加齢対応住宅の要件
4. 在宅ケアにおける住環境情報の収集記録技術
5. 住宅内事故（転倒事故、入浴事故、熱中症など）
6. 単身社会の生活環境の構成要素
7. 農村住宅の快適性の評価

渡部 和生 特任教授〔設計〕

空間デザイン研究室

1. 近代建築の空間デザイン上の再考
2. 設計デザインのタイプ別考察
3. これからの現代建築の展開の考察
4. 実際の建物を見ながら空間デザインを確認する

浦部 智義 准教授〔論文・設計〕

建築計画研究室

1. 劇場・コンサートホールに関する多角的な研究
2. 文化・医療など施設計画・評価に関する研究

3. 農村舞台など地域資源の役割・活用に関する研究
 4. 建築・都市における空間知覚・認知に関する研究
 5. 二地域居住や中山間居住に関する研究
 6. 構法も含めた環境デザイン・パッシブ建築に関する研究
 7. 震災後の復興・復興住宅・まちづくりに関する研究
- 〔設計〕社会的効果・計画手法・空間演出など何らかの説得力のある提案

市岡 綾子 専任講師〔論文・設計〕

住環境計画研究室

1. 居住空間、住環境、子育て環境に関する研究
2. 学校施設、学習環境に関する研究
3. 子どもを中心とした環境行動に関する研究
4. 地域におけるまち資源の活用に関する研究
5. 震災後の居住環境・復興まちづくりに関する研究
6. 地域住民との協働によるまちづくりに関する研究

■都市計画・設計

土方 吉雄 准教授〔論文・設計〕

都市計画第一研究室

1. 子どもの屋外遊び環境に関する研究
 2. 中心市街地のエリアマネジメントに関する研究
 3. まちなみ景観形成ルールの住民合意形成に関する研究
 4. 都市の土地利用コントロールに関する研究
 5. 震災復興まちづくりに関する研究
- 〔設計〕都市設計、地区設計、建築設計

構造・材料系

■構造

浅里 和茂 教授〔論文〕

鋼構造デザイン研究室

1. 応答解析を利用した鉄骨大スパン架構の耐震補強法に関する研究
2. 偏心ガセットプレートのディテール改修方法に関する研究
3. 鋼構造接合部のFEM解析による弾塑性挙動に関する研究
4. 福島県内公共建築物の耐震データベース作成に関する研究
5. 鋼構造建築物の弾塑性応答性状に関する研究

千葉 正裕 教授〔論文〕

日比野 巧 助教〔論文〕

振動システム研究室

1. 耐震補強効果の評価手法に関する研究
2. 細長い平面形を有する建物の立体振動性状に関する研究
3. 建物の近似立体振動解析法に関する研究
4. 情報研究棟およびその周辺地盤における地震動観測
5. 郡山市域の地盤および建物の振動性状に関する研究
6. 建物・杭・地盤連成振動系解析に関する研究
7. 各種構造解析プログラムの開発

G・ブンタラ・ステンリー 教授〔論文〕

コンピュータシミュレーション応用力学研究室

1. 自然現象や生物行動的アルゴリズムを利用した建築構造物の最適化に関する研究
2. 無重力状態で自己釣り合い・自己展開できる構造物の研究
3. 建築構造物と鋼管杭による地盤沈下防止・免震効果の研究
4. 住宅用の低コスト・低メンテナンス免震・制振装置の研究開発
5. 3次元地盤・構造物の地震時挙動シミュレーション的研究

6. 地盤、基礎と構造物の相互作用を考慮した大型模型振動実験と解析の研究

野内英治 准教授〔論文〕

空間構造システム研究室

1. 空間構造に関する研究
2. 構造物の非線形解析に関する研究
3. 木質構造に関する研究
4. 構造物の崩壊解析に関する研究
5. 各種プログラミング言語を用いた構造解析ソフトウェアの開発
6. 耐震設計法に関する調査・研究

■材 料

出村克宣 教授〔論文〕

齋藤俊克 助教〔論文〕

建築材料学研究室

1. ポーラスコンクリートの性能評価
2. ポリマーセメントモルタルの性能評価法

3. 補修用ポリマーセメントモルタルの耐久性
4. 竹補強コンクリート・モルタルの開発
5. 鉄筋コンクリート構造物の補修システムの開発
6. 高耐久性塗料の性能評価

サンジェイ・パリーク 准教授〔論文〕

鉄筋コンクリート（R C）構造・材料研究室

1. 自己治癒・自己修復機能を有するコンクリートの開発
2. R C構造物の耐久性改善による長寿命化に関する研究
3. 建築材料の防火性能とその改良についての研究
4. フライアッシュ・焼却灰（溶融スラグ）の土木・建築用コンクリート二次製品に再利用に関する研究開発
5. 放射能による汚染物格納のため超重量・遮蔽コンクリートの研究開発
6. ジオポリマー（セメント使用しない）コンクリートの開発
7. 高強度コンクリートおよび高強度鉄筋を用いたR C構造物の接合部の実験・解析に関する研究
8. インド住宅用の省エネ新構法や歴史的石造建造物調査・保存の研究

東日本大震災における実効的復興支援の構築に関する 特別調査委員会・福島支援小委員会（日本建築学会）の活動について

准教授 土方 吉雄

東日本大震災による福島県の被害の特徴は、地震動による地盤・構造物などの被害と津波による被害が生じているほか、原発事故による放射能汚染が広範囲にわたり、深刻かつ多大な被害を受けたことである。その放射能汚染の結果、震災後4年の現在でも11万人を超える県民の県内外への避難となつて現れ、特に、放射能汚染レベルに応じて区分された帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の避難指示区域が指定された11市町村、人口約8.1万人のうち、これまで解除されたのは田村市都路地区と川内村東部の一部のみである。今後も中間貯蔵施設の建設が予定されているなど、帰還時期の見通しの立っていないエリアを多く含んでおり、避難生活はさらに長期化する見通しである。

日本建築学会の発災以来の復興支援活動は、現在「東日本大震災における実効的復興支援の構築に関する特別調査委員会」（設置期間2014年4月～2016年3月）に引き継がれ、その委員会の下に、調査研究目的の1つ「放射能問題を抱えた福島県のまち・むらの復興計画支援」の具体的方策を検討し実施するための「福島支援小委員会」が設置されている。

福島支援小委員会は、福島県の特長に鑑み、放射線量や人口移動に関する広域でのデータを整理して全体の戦略構築を検討する①広域対策検討WG。仮設生活における生活の質を向上させるアイデアを提示するとともに長期にわたる仮設での生活が適切なものになるよう①とも連携して仮設的居住のありようを考える②仮設生活QOL検討WG。それらとは独立して、福島の特長性に配慮した支援制度のありようを検討する③制度問題検討WG。都市・住宅における放射線防護のありようを検討する④放射線防護のための都市・住まいの手引き作成WGの4WGから構成している。表に示すメンバーは4WGの目的を達成させるため、都市・居住地計画、建築計画、環境計画、法制度と広範囲の分野で構成している。

活動計画は、下記のとおりである。

- ①復興まちづくりの課題整理のための「復興ニーズマップ」

表 福島支援小委員会メンバー（設置当初）

役割	氏 名	所 属	所属WG
主査	土方 吉雄	日本大学	①③
顧問	鈴木 浩	福島大学	
幹事	渡邊 浩文	東北工業大学	①③④
*WG	岩佐 明彦	新潟大学（のち法政大学）	②③
代表	野崎 淳夫	東北文化学園大学	③④
委員	石坂 公一	東北大学	①③
	川崎 興太	福島大学	①③
	間野 博	福島大学	①③
	浦部 智義	日本大学	②③
	大月 敏雄	東京大学	②③
	市岡 綾子	日本大学	②③
	小林 光	東北大学	③④
	一條 佑介	東北文化学園大学	③④
	日置 雅晴	神楽坂キーストーン法律事務所	③

作成

- ②広域的地域再編戦略のための放射線汚染レベル、広域人口移動状況等の基礎データの整理および復興ポテンシャルの計測・予測手法の開発とケーススタディなど。
- ③時系列での課題整理のための「復興ロードマップ」の作成
- ④放射線防護のための調査研究
- ⑤放射線低減レベルに応じた地域再編方針等の提言
- ⑥長期避難生活に対する支援方法に対する提言
- ⑦放射能問題を勘案した復興制度に対する提言
- ⑧放射線防護のための都市・住まいの手引き作成

追：本稿は、筆者による「東日本大震災4周年シンポジウムー福島支援小委員会の活動報告」日本建築学会2015年5月の原稿を下敷きにしている。

山岸吉弘助教 2015年日本建築学会奨励賞受賞

この賞は、日本建築学会員により近年中に発表された、独創性・萌芽性・将来性のある建築に関する優れた論文等の業績を表彰するものである（応募要件を満たした48件から15件の論文が受賞）

日本建築学会奨励賞を受賞して

山 岸 吉 弘

おそらく、多くの人にとって「木割」という言葉は馴染みがないでしょうし、まして、室町時代の大工が編み出し、江戸時代の大工に広く普及した、建築を設計するための技術であることを知る人は少ないと思います。ですが、伝統的な建築を理解する上で、木割ほど便利なものはありません。

木割とは、建築を設計するための方法を理論化したものです。具体的に、桃山時代に作成された『匠明』という木割書をみてみましょう。『匠明』は、江戸時代の大工である平内（へいのうち）家に継承された秘伝書で、五巻からなる巻物です。平内家は、江戸時代の大棟梁（幕府の職制で、技術者の最高位）を勤めた当時を代表する大工でした。

五巻の一つ「社記集」には、神社の建築に関する内容がまとめられています。その中にある「一間社」の冒頭には「表間二して柱太寸算」と記されており、柱間と柱径の寸法が規定されています。「柱太サ」とは「柱径」のことであり、「表間」とは「正面柱間（柱と柱の間）」のことです。また、「寸算（すんかぞえ）」とは尺に対して寸（ $=0.1$ 尺）、つまり十分の一であることを意味します。従って、この一文で表される内容は「柱径は正面柱間を十分の一にした大きさである」になります。このように、部分と部分（部材と部材）の関係性が繰り返されることで全体の姿が描かれます。つまり、建築を設計することができるのです（図1）。

木割を理解するためには、当然ながらまずは木割書を読むことから始めなければなりません。しかし、木割書に記述されている文字は、現在の我々が使用する文字と異なり、「くずし字」が用いられています。くずし字とはかつて日常的に用いられた書体で、漢字や仮名を文字通り崩して書く方法です。

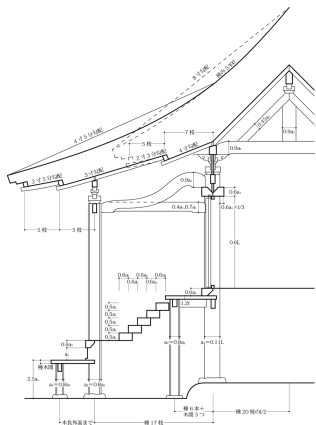


図1

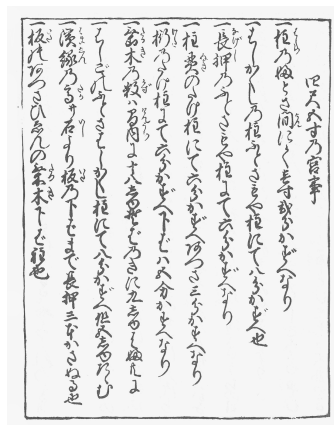


図2

例えば、木割書の一つである『新編拾遺大工規矩尺集』は、木版で刷られた公刊本で、江戸の本屋に並んでいたと思われます（図2）。一見して、我々が使用している文字とは異なる事が分かります。慣れれば便利な書体ですが、初めて読む人にとってはやっかいな代物です。まるで外国語のようですが、辞書を引ながら一文字ずつ読み進めていきます。読めない文字が読めるようになる瞬間は嬉しいもので、いつの間にか辞書がなくても判断が付くようになります。

大学4年生になって所属した研究室では、これら木割書が主な研究対象の一つでした。大学院に進学すると、木割書をテキストとして文献を読解する基礎的な訓練をゼミで行います。一年生と二年生が二人一組になって、読解した内容を発表します。ゼミは、四～五十名いる研究室メンバー全員が参加し、数時間を掛けて議論します。発表を担当する前の二週間くらいは準備にかかりきりとなり、連日の泊まり込みの作業です。そのようにして、木割書が読めるようになりました。

ゼミが終わっても、個人的な研究テーマとして木割書の読解を継続しました。始めは、指導教官から「王子造り」という課題を与えられたためでしたが、その内に自主的に取り組むようになりました。王子造りについては、神社建築の一つの形式であることが知られている程度で、それ以上のことは余りよく分かっていませんでした。王子造りの謎を解く、という目的で続けていた研究ですが、木割書を読み進めていくうちに思い掛けない発見もありました。

それは、かつての大工が建築に対してどのような思いを抱いていたか、という事実です。木割書は、建築に携わる大工が自らの言葉として残した唯一の記録です。もちろん、大部分は木割という形式に則られた定型句が続くのですが、稀に大工の考えがそのまま生の言葉として記されているのではないかと、いう場面に出くわします。そのとき、数百年の時空を超えて、当時の建築家である大工の秘密がよみがえったような気がして、とても興奮したことを覚えています。

そのようにして行っていた研究の成果を適宜に論文にまとめ、日本建築学会が発行する学術誌に発表してきました。その内の一つ「木割書に記述される柱一組物一垂木の関連について—木割の方法に関する研究（その1）—」で、奨励賞をいただくことができました。奨励賞は研究者への登竜門でもあり、ようやく研究者の仲間入りができた気がしています。

図1 『匠明・社記集』「向妻作り 一間社之図」復元図（伊藤要太郎 著『匠明五巻考』、鹿島研究所出版会、1971.12に加筆）

図2 『新編拾遺大工規矩尺集』「四尺五尺之宮」の冒頭部分

日本大学工学部の思い出 ～地元のために、公務員として頑張ります～

栗田 鉄也（土方研究室）

出身校：静岡県立島田工業高校



私は静岡県の島田工業高校で建築を学び、建築科の教員になることを目標として大学進学を決めました。大学の候補はいくつかありましたが、教職科目が充実していて先輩が多いこと、景気が悪い中でも高い就職率を維持していたことが大きな決め手となり日大工学部を選びました。こうして選んだ母校、日大工学部では、非常に充実した4年間を過ごすことができました。勉強や設計の課題では苦労することもありましたが、それをきっかけに多くの友人と出会うことができ、はじめは不安だった一人暮らしも、家族を頼ることができない環境に身を置いたことがよい経験になりました。4年間で多くの思い出ができましたが、中でも一番印象に残っているのは4年後期の卒業研究に取り組んでいた頃のことです。私は都市計画第一研究室に所属し、児童の遊び環境について研究しました。毎日研究室に通い、自分の論文と同時に他の研究や設計を手伝いながら趣味の模型作りをして、忙しくも楽しい半年間でした。研究室に入ったばかりの頃は、それまで話したことも無かった人も多くぎこちない関係でしたが、互いに研究や設計を手伝い合うことで団結力も高まり、最後には卒業するのが嫌になるほど仲良くなっていました。卒業した今ではそれぞれ地元で就職し、私も故郷の静岡県で、大きな被害が想定されている東海地震をはじめとした災害の被害を最小限に抑えたいという思いから、県の防災に携わることを目標に静岡県庁に勤めています。今の私があるのは、多くの先生方や共に助け合った友人達、支えてくれた家族がいたからこそだと思っています。後輩の皆さんにも、助けてくれる先生方や友人との関係を大切にしたいと思います。

中島 希（浦部研究室）

出身校：福島県立白河高校



白河市役所の内定を頂いた時期と、卒業設計に取り組み始めた時期が同じ頃だったため、自分が近い将来に市役所の職員として働き出した時、この卒業設計に取り組んだ経験が少しでも活かせるようにしたいと考えていました。実際に市役所職員になった今振り返って見ると、選定した敷地が白河市の市街地だったこともあり、調査を通して市民の飾らない生の意見を色々と聞くことができたことが、非常に良い経験の一つだったと思います。実際に働き始めてはじめて、学生として聞くことができる話と、市の職員として聞くことができる話は違うと実感したからです。これは学生のうちでないとできない体験でしたし、そのような意見を出発点として考えた卒業設計は、自分が育った地でありながら、白河市について今までにはないほど深く考える良い機会となり、現職にも活かされていると思います。

また研究室のプロジェクトの一環で、卒業設計と並行して、福島県内で行政・民間それぞれの立場で、卒業設計に役立つ「まちづくり」を考える機会もありました。その際、民間が行政に求めること、行政ができることなど、学ぶことが沢山ありました。特に印象に残っているのは、民間側でまちづくりに携わった際、施設をいかに運営していくかという話題で話が詰まる体験が多かったことです。それらを通して、施設のあり方や行政ができること・考えるべきことなど、現職においても役立つ重要な気づきが得られました。

これらの大学での経験を活かして、今後行政の立場で、まちの将来を見据えながら、長い目で白河市のまちづくりにも貢献できるような仕事をしたいと考えています。

文化施設を見る2つの視点

大学院博士前期課程2年 樋口卓史

晴天に恵まれた5月31日、アーキテクトコース3年次生を対象に講義の一環で、白河市にある2つの文化施設「福島県文化財センター まほろん」（設計：佐藤総合計画）・「白河市立図書館」（設計：第一工房）を巡る見学会が催され、20名が参加しました。指導補助のTAとして私も参加し、学芸員の案内のもと、普段なかなか見る機会のない収蔵庫などの裏方まで見学することができました。本格的な公共施設の設計課題は、3年生にとって初めての経験になります。有りがちなのは、美術館の設計では展示室などよく知っている部分の寸法や配置などの提案はバラエティに富んでいるのに対し、サービス動線や搬入搬出といった裏方部分はどうしても疎かになってしまうことです。そういった意味で、建築家である渡部先生と施設の運営者である学芸員の方という2つの視点で、異なる良さを持った質の高い建築の解説は、3年生だけでなく、私にとっても貴重な機会となりました。この経験は、今回の設計課題はもちろんのこと、今後の設計にも「未来の設計者」として活かして欲しいと思っています。



学芸員によるまほろんの見学



白河市立図書館の外観を解説

新任の先生

教授 森山 修治

担当科目：建築設備



今年4月より建築学科の教員となりました森山修治です。3月31日まで、30年間、東京の設計事務所に勤務しておりました。生まれは郡山市の約60km南に位置する東白川郡塙町で、出身高校は県立白河高校です。小学校時代には郡山は憧れの都会であり、誕生日の楽しみは”うすい百貨店”でオモチャを買ってもらい、店内の食堂でお子様ランチを食べることでした。高校卒業後、家業の製材業を継ぐつもりで東京の大学の建築学科に進学しましたが、在学中に木材不況により実家が廃業してしまい、やむを得ず都内で就職することにしました。そこで初めて自分が何をやりたいかを考え、就職先として研究と設計ができる日建設計を選択しました。日建設計入社後は空調設備や衛生設備の設計を始めたのですが、最初の10年間は仕事を覚えるので精いっぱいでした。入社10年を過ぎた頃から、当時、法規によらない性能設計の研究が盛んであった防災に興味を持ち、独学で勉強を始めました。目標は建築意匠・設備と防災計画を融合させた建物の設計です。教科書としたのは「建築物の総合防火設計法（全4巻）」（平成元年、建設省技術調査室監修）ですが、文献の理解には大学で学んだ環境工学の知識が大変役立ちました。それでも理解できないことは著者に直接質問しましたが、皆さん親切に対応してくださいました。このようにして得た知見は設計に反映させ、当時の建設大臣の認定を得て建物として実現させました。研究と設計を同時にやる楽しさは、研究成果を好きな形に実現できることです。研究を実務に反映させることには障害が付き物ですが、仕事仲間にも恵まれました。困難な仕事を信頼できる仲間と成し遂げることは楽しいことです。“研究が好きな設計者”から“設計もできる研究者”に変わったきっかけは、2003年に韓国大邱市で起きた地下鉄火災事件で、自殺志願者の放火により地下鉄車両と駅舎が全焼し192人が亡くなりました。日本で同じ放火が起きたらどうなるかが問題になり、東京消防庁の支援のもとに実際に稼働している地下鉄駅舎で火災実験を行うことになり、実施部隊のリーダーになりました。この火災実験は土曜深夜の終電後から日曜早朝の始発までの約4時間の間に、機材を駅舎内に搬入、アルコールパンを燃やし総長200mの駅舎全体の気温・風速を測定後、機材を撤収するというハードな実験でした。実験成果は報告書と論文にまとめ、建築・消防行政にも生かされました。これをきっかけに実験の面白さに取つかれ、設備設計の仕事の合間に東京駅地下街を一晚借り切った避難実験や大規模展示場のエスカレータを利用した避難実験などを企画し実施しました。次のきっかけは2011年の東日本大震災です。津波や地震の調査を重ねるうちに故郷の被害や塙町に一人住まいの母のことが気になり、郷里に帰ることとし日本大学工学部の教員に応募しました。これからは“設備設計と研究ができる教育者”を目指します。病院等の機能維持計画（BCP）、文化財の保護・減災、津波避難計画などを研究するつもりです。一緒に研究する学生さんを募集中です。

非常勤講師 古河 司

担当科目：特別講義（耐震工学）



今年度4月より「特別講義（耐震工学）」を担当させていただきます「ふるかわつかさ」です。どうぞよろしくお願いいたします。

今年3月までの35年間を建築技術の県職員として、建築行政に携わりました。

とりわけ、就職直後に【住宅が揺れる】という県民の悲痛的な叫びに現場へ向かい【3階建ての3階の柱を自ら押して揺れる】を体験したことで、建築の三大要素の「強用美」*の中でも「強」が基本であると考えさせられました。このため、構造計算書の審査や工事現場の検査をしっかりと妥協せずに実施してきました。（*古代ローマ時代の城郭の設計者Vitruviusが『建築十書』で述べている。）

現在は、建築物の構造計算等が法律の基準に適合しているか否かの判断を行う「構造計算適合性判定機関」である（一財）福島県建築安全機構において、申請書の受付から適合書の交付までの業務を行っています。このため、常に最新の設計基準の情報を入手できる環境に身を置いております。

そこで、特別講義（耐震工学）では、これまで得た知識・経験に加え、最新の情報を適時適切に伝えていきたいと考えています。このことが、皆さんの設計・施工する建築物がより安全なものとなるための一助となれば幸いです。

非常勤講師 寺嶋 守

担当科目：建築設計演習



今年度から非常勤講師として、設計演習を担当致します寺嶋守です。現在、仙台で設計活動しております。主な設計は住宅から高齢者・障害者福祉施設、少し変わったところでは寺院などです。建築の世界に入った1970年代、モダニズム建築を学んでいた者にとっては驚きだったのですが、過去の様式のパッチワークのようなポストモダン建築が現れました。バブル崩壊を経て下火になりましたが、われわれは現在、ポストモダン状況にあるようです。また製図もCADになり、情報取得はインターネット検索になりました。設計環境の変化とも相俟って、いまの建築は硬直したモダニズムから解放され、百花繚乱と言えなくも無い状態です。皆さんもその影響を受けている人、全く関心のない人さまざまだと思います。ひとつの方向性のないポストモダン状況下でも大切なことは先ずは「建築する」ということです。当たり前ですが建築は設計者の中だけで完結することはないのです。他者との対話を通して存在させることができるのです。演習における私たちとのエスキースは皆さんの将来に必ず役に立つと考えています。よろしくお願い致します。

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・ D.K. Nguyen, Buntara S. Gan, T.H. Trinh and S. Alexandrov, "Post-buckling Behavior of Elastic-Plastic Functionally Graded Beams Subjected to Eccentric Axial Load", Journal of Multidisciplinary Engineering Science and Technology (JMEST), Vol.2, Issue 5, pp1129-1135, 2015
- ・ 芳賀沼整・浦部智義・石坂公一, 「木造仮設住宅の再利用特性に関する研究—東日本大震災後の福島県内の木造仮設を対象とした考察—」, 日本建築学会計画系論文集 第80巻 第710号, pp813-822, Apr.2015
- ・ Trinh T. Huong and Buntara S. Gan, "Development of Consistent Shape Functions for Linearly Solid Tapered Timoshenko Beam", 日本建築学会構造系論文集 第80巻 第713号, pp1103-1111, July 2015

発 表 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- International Conference on Mechanics of Complex Solids and Fluids 日時: 平成27年 5月17~22日 会場: Lille, France
 - ・ Post-buckling Response of Asymmetric Frame Made of Axially FGM ○Trinh T. Huong, Nguyen D. Kien and Buntara S. Gan
- 人間・環境学会第22回大会 日時: 平成27年 5月16日 会場: 東洋大学朝霞キャンパス (埼玉県)
 - ・ 歴史的なまち資源を活用したまちづくり ○市岡綾子
- UIA- Public Health Group 2015 Seminar 日時: 平成27年 5月23~25日 会場: Dalian World Expo Center, Dalian, China
 - ・ Art and Science of Health and Welfare Facilities and Town of the Sustainable Society ○Masato Utsunomiya
- 日本建築学会東北支部研究報告会 日時: 平成27年 6月20~21日 会場: 山形大学地域文化教育学部 1号館
 - ・ タブーサーチを用いた杭の最適配置に関する研究 小規模住宅における杭の最適配置について ○原崇太, Buntara S. Gan
 - ・ 鉄骨置屋根形式RC造建屋の耐震補強における屋根面ブレース設計に関する研究 その3 レベル2地震波による置屋根支持部の検討 ○星小百合, 浅里和茂, 清水健次, 成瀬啓一, 瀬下守, 千葉正裕, 日比野巧
 - ・ 竹補強ポリマーセメントモルタルの曲げ性状に及ぼすセメント混和用ポリマーの種類の影響 ○我喜屋宗満, 齋藤俊克, 出村克宣
 - ・ ポーラスコンクリートの静弾性係数と動弾性係数の関係 ○齋藤俊克, 出村克宣
 - ・ 塩化物イオン固定化材混入ポリマーセメントモルタルの防せい効果 ○渡辺幸宗 (㈱トクヤマエムテック), 齋藤俊克, 出村克宣
 - ・ インド産及び日本産フライアッシュを用いたジオポリマー硬化体の養生条件及びスラグ置換率が圧縮強度に及ぼす影響 ○五十嵐祐太, Sanjay PAREEK
 - ・ 銅スラグを用いたジオポリマー硬化体の基礎的研究 ○高橋広大, Sanjay PAREEK
 - ・ 自己修復システムを付与したモルタルの鉄筋腐食に対する抵抗性の検討 ○尾形雅人, Sanjay PAREEK
 - ・ 超弾性合金を主筋としたRC梁部材に対するASRSの開発 ○上野拓, Sanjay PAREEK

■速水教授は、3月10日、建築家会館にて開催されたJIA関東甲信越支部における連続シンポジウム『厳しい時代に建築家が創造的であり続けるために』第2回「建築士法改正を読み解く〜『建築士』を再考する」にて、「建築士法を制定に立ち戻って考える」と題して講演された。

■鈴木教授は、3月15日、横浜ラポールで開催された日本リハビリテーション連携科学学会大会における学会企画セミナー「リハビリテーション連携の検証」において招聘講演を行った。

■浅里教授は、3月19日、須賀川地方保健環境組合より、須賀川地方新ごみ処理施設建設運営事業者選定委員を委嘱され、副委員長に選出された。

■浦部准教授と浦部研究室のログ構法の開発・研究とその計画・設計等の実践に関する一連の活動が、住宅特集4月号で『縦ログ構法 震災復興から地域産業の活性化へ』として特集された。

■浦部准教授は、芳賀沼整氏、五十嵐太郎氏、浅子佳英氏、青井哲人氏、中川純氏と連名で、建築ジャーナル2015年4月号「特集: 3.11から4年 2 震災・原発事故と建築家」に「原発事故現場20km圏内を見て」と題して寄稿された。

■中島希さん (H26年度卒: 浦部研) の卒業設計「見えない囲いー施設の面的解体ー」が、4月11日、JIA全国学生卒業設計コンクール2015東北支部審査会を通過し、6月27日に開催されたJIA全国学生卒業設計コンクールに出展され、出展作品52作品のうち1次審査を通過した33作品に東北から唯一選出された。

■浦部准教授は、4月22日、福島市より、

福島市公共施設等総合管理計画等策定支援業務委託プロポーザル方式事業者選定委員会の委員を委嘱された。

■速水教授は、5月9日、福井商工会議所ビル国際ホールにて開催されたJIA北陸支部大会にて、大会特別講演として『「建築家と建築士」ー建築士法を再考するー』と題する講演を行った。

■土方准教授は、5月18日、建築学館ホールにて開催された日本建築学会「東日本大震災4周年シンポジウム」において、福島支援小委員会の活動報告を報告された。

■浦部准教授は、5月18日、古殿町より、古殿町「まち・ひと・しごと創生町民会議」の議長を委嘱された。

教室ニュース

■市岡専任講師は、5月18日、福島市より、福島市景観審議会の委員を委嘱された。

■齋藤助教は、5月20日、平成26年度日本コンクリート工学会 (JCI) 東北支部奨励賞 (題目: エマルション処理竹補強材を用いた竹補強セメントモルタルの曲げ性状に及ぼす養生方法の影響) を受賞した。

■浦部准教授と浦部研究室が計画・設計に関わった『希望ヶ丘プロジェクト: 小規模コミュニティ型復興住宅技術モデル群』が、5月23日、グランドオープンした。

■土方准教授は、5月24日、福島県より、福島県都市計画審議会都市政策推進専門小委員会において、テーマ「コンパクト+ネットワーク」のプレゼンターを依頼された。

■速水教授は、6月1日、郡山市より、郡

山市文化財保護審議会の委員を委嘱された。

■浦部准教授と浦部研究室が、Bunkamura Box Galleryでの展示空間デザインに係わった『花結び展〜草から生まれた日本の花、鳥〜TOKYO 2015』が6月3~9日、開催された。

■土方准教授は、6月5日、福島県より、福島県総合計画審議会委員を再度委嘱された。

■速水教授は、6月13日、梅田スカイビルタワーウエストで開催された、NPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫、

(公社)大阪府建築士会、(公社)日本建築家協会近畿支部、(一社)日本建築協会、(一社)大阪府建築士事務所協会の共同主催による「安心な住まいとまちをささえる『建築家と建築士』の役割とは『建築家と建築士ー法と住宅をめぐる百年』著者と語る」において講演された。

■土方准教授は、6月14日、福島県より、チャレンジふくしま若者リーダーまちづくり事業・ワークショップのファシリテーターを依頼された。また、国分里君、福智大輝君、村上七々佳さん、渡辺亨君 (以上、土方研4年次生) は、推薦されワークショップに参加した。

■齋藤助教は、6月19日、中央大学駿河台記念館で開催された日本コンクリート工学会 (JCI) の「性能設計対応型ポーラスコンクリートの施工標準と品質保証体制の確立に関するシンポジウム」において、「既往の研究と事例調査の報告 研究編」と題して講演された。

■人事: 4月1日付で、森山修治教授が着任された。また、本学科に永年勤務され、設計指導・教育と研究に活躍された松井壽則准教授が3月31日に退官された。

建築学教室教職員名簿

平成27年7月1日現在

■専任教員

教授	授	浅鈴	里木	和正	茂晃	鋼建	構	造	16号館	1階	106	(956-8734)
教授	授	千出	葉村	克裕	晃裕	建築	計	画	16号館	3階	311	(956-8741)
教授	授	濱田	幸田	宣雄	裕宣	建築	力	学	16号館	2階	205	(956-8733)
教授	授	速水	清	孝	雄	建築	材	学	9号館	1階	114	(956-8740)
教授	授	ブンタ	S.G.	孝	孝	建築	環	工	16号館	3階	310	(956-8752)
教授	授	三浦	金	孝	孝	建築	代	史	9号館	3階	310	(956-8872)
教授	授	森山	修	治	孝	建築	基	造	16号館	2階	206	(956-8735)
教授	授	湯本	長	伯	孝	都建	市	計	45号館	2階	207	(956-8753)
教授	授	渡部	和	生	孝	都建	築	設	16号館	3階	311	(956-8751)
教授	授	浦部	智	義	孝	都建	築	構	9号館	3階	311	(956-8749)
教授	授	野内	英	治	孝	都建	築	設	45号館	3階	301	(956-8750)
教授	授	S.N.	パ	リ	孝	都建	築	計	9号館	3階	309	(956-8743)
教授	授	土方	吉	雄	孝	都建	築	計	16号館	2階	207	(956-8744)
教授	授	市岡	綾	子	孝	都建	築	計	9号館	1階	102	(956-8747)
教授	授	齋藤	俊	克	孝	都建	築	計	45号館	3階	304	(956-8742)
教授	授	日比	野	巧	孝	都建	築	計	45号館	3階	305	(956-8746)
教授	授	山岸	吉	弘	孝	都建	築	計	9号館	1階	114	(956-8740)
教授	授				孝	都建	築	計	16号館	2階	205	(956-8733)
教授	授				孝	都建	築	計	9号館	3階	310	(956-8872)

■大学院：兼任教員・非常勤講師

兼担教授	根本	上杉	彰省	生三人	地域	計画	特論	45号館	2階	207	(956-8753)	
兼担教授	本杉	都宮	雅省	三人	建築	設計	計画	特論	9号館	3階	309	(956-8743)
非常勤講師	宇都	宮内	富雅	人夫	建築	職業	倫理	特論	9号館	3階	311	(956-8749)
非常勤講師	大狩	野内	勝富	夫重	建築	防災	工学	特論	16号館	3階	309	(956-8730)
非常勤講師	大狩	野倉	勝洋	重介	建築	技術	史学	特論	16号館	3階	309	(956-8730)
非常勤講師	熊倉	田倉	光洋	介春	建築	設計	計画	特別実習	9号館	3階	309	(956-8743)
非常勤講師	倉田	瓶田	光博	春厚	構造	解析	特論	16号館	2階	207	(956-8744)	
非常勤講師	二瓶	尾瓶	博博	厚文	建築	意匠	特論	16号館	3階	309	(956-8730)	
非常勤講師	濱米	尾田	博文	文彦	建築	構造設計	特別実習	16号館	1階	106	(956-8734)	
非常勤講師	米田	正田	正彦	彦彦	建築	職業	倫理	特論	9号館	3階	311	(956-8749)

■学部：非常勤講師

非常勤講師	秋月	直道	道人	建築	設計	計畫	演習	45号館	3階	301	(956-8750)
非常勤講師	阿倉	持藤	由男	建築	設計	畫施	習工	45号館	3階	304	(956-8742)
非常勤講師	近境	幸道	孝一	建築	設計	演習	習工	16号館	3階	309	(956-8730)
非常勤講師	佐久間	宏英	次子	建築	設計	演習	習工	9号館	3階	310	(956-8872)
非常勤講師	佐藤	マリ	美守	建築	設計	演習	習工	16号館	2階	206	(956-8735)
非常勤講師	島田	雅	美宏	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	304	(956-8742)
非常勤講師	田中	嶋	実	建築	設計	演習	習工	16号館	2階	207	(956-8744)
非常勤講師	寺嶋	尾	宏	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	304	(956-8742)
非常勤講師	鍋田	澤	仁	建築	設計	演習	習工	45号館	2階	207	(956-8753)
非常勤講師	原	山	雄	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	301	(956-8750)
非常勤講師	檜	野	朗	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	304	(956-8742)
非常勤講師	平	田	幸	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	301	(956-8750)
非常勤講師	藤	河	司	建築	設計	演習	習工	9号館	3階	309	(956-8743)
非常勤講師	古	井	一	建築	設計	演習	習工	45号館	3階	304	(956-8742)
非常勤講師	若	澤	典	建築	設計	演習	習工	16号館	3階	309	(956-8730)
非常勤講師	渡	邊	宏	建築	設計	演習	習工	16号館	3階	310	(956-8752)
非常勤講師	渡			建築	設計	演習	習工	16号館	3階	309	(956-8730)
非常勤講師	邊			建築	設計	演習	習工	45号館	3階	301	(956-8750)

■事務職員

教室事務	小林	まゆみ	建築学科センター	16号館	3階	309	(956-8730)
------	----	-----	----------	------	----	-----	------------